

(社) 東洋音楽学会関西支部

支部だより 第11号(1992-2-10)

Newsletter of the Kansai chapter, Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のご案内

(社) 東洋音楽学会関西支部 第157回定例研究会

と き 1992年2月29日(土) 14:00~17:00

と ころ 神戸大学教育学部音楽棟1階 C-111教室

神戸市灘区鶴甲3-11 ☎078-881-1212 内線7238(岩井研究室)

当日は土曜日のため13:30まで

交 通 阪急六甲駅、またはJR六甲道駅、または阪神御影駅から、市バス36系統
に乘車、神戸大教育学部にて下車。

音楽棟は門を左へまっすぐ約100メートル、左手。

14:00~15:00【研究発表】

『平曲「竹生島詣」に関する音声分析』

——前田流名古屋の伝承者による音声の一考察

発表者：篠原真紀子(神戸大学大学院)

司 会：未定

——休息——

15:30~17:00【連続講座】“研究の過去・現在・未来”

シンポジウム『アラブの音楽研究における今日的課題』

パネリスト：水野信雄(兵庫教育大学)

栗倉宏子(中京大学)

司 会 岩井正浩

研究演奏 サントウールの演奏 プーリー・アナピアン

‡研究会終了後、懇親会を予定しております。ぜひともご参加下さい。
(会場等は最終面に記載)

担当 企画調整(渡辺浩子)

会 場 (岡部芳広)

中国のような「文字に書き留められた」文化の場合、フィールドワークと文献資料との関係が煩わしく思われることが度々ある。フィールドワークといっても文献資料を無視するわけにはいかないが、文献資料に手を出すと、膨大な資料の海に溺れてしまう感じがする。

もちろん中国にも文字を持たない民族と地域はあるが、そこでも同じ問題が潜んでいる。というのは、当該民族には文字と文献資料がなくても、漢民族を始めとする周辺民族の文献に記録がある可能性は大きい。たとえ調査の対象となる民族とその文化事象を直接的に記していなくても、近隣民族や地域内にある、同じ文化事象に関わる文献資料もある程度参考になるはずである。さらに強調したいのは、漢字文化圏という観点から、漢字自体が非常に広範囲にわたって、資料としての価値を持つことである。

全体的に文化人類学や民族音楽学などの新しい学問は、欧米より発生したものである。それゆえ資料としての漢字の特殊性については、つい最近までおろそかにされてきたように思われる。漢字は、現在では殆ど唯一的な表意文字として東アジアを中心に広範囲で実用されている。一方、その字形の進化と推移はおよそ4千年ほど前まで遡ることができる。その象形的、図象的性格に由来する伝達力は、時空間を越えて伝達できるといった、いわゆる文字一般の持つ「遠隔伝達性」とは違い、異文化や異言語の壁をさえも越えて伝達するパワーがある。また、その象形的、原初的な形態を解読することは、文字がはじめて発生する時における原初的な文化の形態や、それについての人間の認識と意味付けの過程などをかなり明確に読み取ることができる。歴史的、通時的な研究において避けて通れぬ資料であるばかりでなく、フィールドワークから得たデータと比較し照合しながら利用するのも非常に有効で、不可欠な資料であろう。改めて考えさせられることが多々あるものである。

フィールドワークと観光

大東 純子

近年の観光産業の躍進にはめざましいものがある。新聞の海外旅行ツアーの広告を見ると、少し前までは一般の観光客がとてども足を踏み入れなかったような地域への案内が載っている。あるいは『地球の歩き方』をバイブルに、地球上のあらゆる地域に若い旅行者の姿が見受けられる。旅行した先々で出会った本場の祭りや踊りを小型で高性能の録音機やホームビデオでしっかり記録したり、ワールドミュージック・ブームの影響で、現地で制作された民族音楽やポピュラー音楽のテープ集めたりする「通」もぼつぼつあらわれてきている。調査にでかけ、記録した珍しい音楽や踊りを材料に、音楽文化の一端を分析・記録するのが仕事である我々フィールドワーカーにとって、うかうかしてられない時代になってきたのかもしれない。

一方、観光を基幹産業に据えて「観光立国家」を推進していこうとする国々にとって、伝統芸能は観光客に十分アピールする商品価値をもっている。たとえば、昨年来日したギリシャのネリー・ディモグル民族舞踊団は文化省ではなく、観光局のバックアップを受け、観客の大半は外国人観光客という。すなわちギリシャ政府にとって民族舞踊は文化として保護・育成していく対象ではなく、観光事業の「商品」なのである。

我々民族音楽学者は「伝統」的に伝承されてきた純粋培養的な音楽こそ固有の文化と見え、このような観光の商品として人為的に加工され、観光客のためにディスプレイされた音楽や舞踊を「にせもの」として研究対象から排除する傾向にあった。しかし、この「にせもの」は、とくに文化変容の問題を考える格好の素材を提供してくれるのかもしれない。そろそろ「観光化された音楽」にも目を向ける時期がきたのではないだろうか。

アラブ諸国の音楽研究における今日的課題

水野 信男

地理的・文化的にみて、日本からもっともおい地域のひとつ、中東・アラブ諸国の音楽研究は、その近代の被植民地ともあいまって、最初、ヨーロッパの学者たちによって、本格的に開始されたといつてよい。しかし、各国があいついで独立した今世紀中庸以降、アラブ人自身による音楽研究が急速に展開しはじめた。そしてこの後者の傾向は、今後ますます進むものと思われる。

かつてはこの地域の音楽にアプローチしようとするとき、欧米の学者たちの書いた文献資料にまずあたるのが常識だった。つまり、中東の文化を、欧米の学者の目をとおしてながめることからはじめたのである。だがアラブ人研究者がその自身の音楽を研究する場合、欧米人とはことなる思考形態をとる。そのあつかう資料についても、彼等のものは、通常外国人研究者が用いるそれとはことなっていることがわかってきた。

このような視点からすると、私たちはアラブ音楽研究において、これまでのように、たとえば欧米を経由し、ワンクッションをおくのではなく、まずは直接にその対象に身をもってアタックすべきなのである。それをおこたると、外側のみとらわれ、彼等の音楽の内奥がついにわからずじまいとなる危険性すらある。

むろんそのような研究態度の転換に際しては、いくつかの問題点が浮上する。その第一は言葉の問題である。アラビア語のふかい知識がどうしても欠かせない。次には学際的な調査手法、さらには現地の学者や研究機関との共同作業・共同研究の模索である。これらをとおして、私たち外国人は、そのフィールドワークをより効果的なものとするこができるだろう。

今回は報告者のエジプト、シリアなどにおける事例研究の具体的経験をもとに、過去と未来をみわたしつつ、その今日的課題について検討がなされる。

フィールドワークレポート

ペルシャ古典音楽

阪田 順子

ペルシャ古典音楽の真髄アーヴァーズ (avaz) が非拍節的リズムだということを知っている人も多くなった。これもマスメディアの力であろうか。

バルケンシュリからつながる柘植、ネトル、ゾニスらの1960年代以降のペルシャ古典音楽研究は、決して数は多くないが優れた業績を我々後進者に残してくれている。また詩の韻律との深い関係についてはいくつかの論文があるし、曲を構成するゲーシェの分析も比較的よくなされている。今後は、各楽器(ネイ、カマンチェ、サンツール、ザルブ等)の演奏面からの内部的アプローチが望まれると考える。

たしかにペルシャ古典音楽は一見つかみどころがなく、とりとめがないような錯覚におちいる性質を持つが、根気よく気長にデータ分析を重ねれば求めるものもみえてくるであろう。

私は、サントウール用のラディーフをもとに、アーヴァーズのところどころに記された曲折のための詩的な指示の小文を参考に、ペルシャ文学方面からのアプローチを試みた。例えば、①老人のようにのたのと、②若者が船にゆられながらすすむようになどの小文がある。西洋音楽の楽譜でみられる様式化された用語の扱いはなく、どれをとっても一つ一つ演奏者に詩的イマジネーションを膨らませるようなものである。その結果どのような演奏の違いがみられるのか興味深いところである。

また、サントウールの打弦法について、各ダストガー(旋法)特有の手の動きがどのくらいどのようにあるのかを旋律・リズム両面にわたってのパタン化を主に、分析考察を試みている。この考察についても、ひき続き莫大な量の分析が望まれる。

懇親会のお知らせ

- *ところ 陣（鍋物）☎078-851-8141
阪急六甲駅から線路沿いの道（道路の南側）を東へ（大阪方面）約2分
- *とき 2月29日（土）
- *時間 18:00～20:00
- *会費 5000円程度
- *参加ご希望の方は2月24日（月）までに 岡部までご連絡下さい。
- 留守の場合、留守番電話に所属とお名前をはっきりいれてくだされば結構です。
- *お申し込み後のキャンセルも2月24日（月）までをお願いします。
- *大学に所属の方は、とりまとめてご連絡下さい。

今後の定例研究会開催予定

- 第158回（予定） 4月18日 大阪音楽大学
- 第159回（予定） 6月13日 大阪大学
- 第160回（予定） 9月19日 国立民族学博物館
- 第43回大会
- 第161回（予定） 12月12日 神戸大学

◆申込方法

連続講座・フリーの別、発表の種別（研究発表・調査報告・資料紹介・研究演奏の別）発表題目、使用希望機器、希望日、所属、氏名、連絡先、を葉書に明記の上、下記宛てにご送付下さい。申込多数の場合など、必ずしもご希望に添えないこともありますのであらかじめご了承下さい。

◆送り先

⑥57 神戸市灘区鶴甲3-11 神戸大学教育学部岩井研究室
東洋音楽学会例会係

◆第12号 4月上旬発行予定（4月定例研究会案内）原稿締切2月29日

お忙しい中原稿をお寄せ下さった皆様、どうも有難うございました。また、通信・連絡などでご迷惑をおかけした方々もご協力有難うございました。 渡辺浩子

支部関係の問い合わせ先

関西支部 ☎559 大阪市住之江区南港中4-4-1 相愛大学音楽学合同研究室内
☎06-612-5900 内線331

定例研究回・支部だより

⑥657 神戸市灘区鶴甲3-11 神戸大学教育学部岩井研究室
☎078-881-1212 内線7238